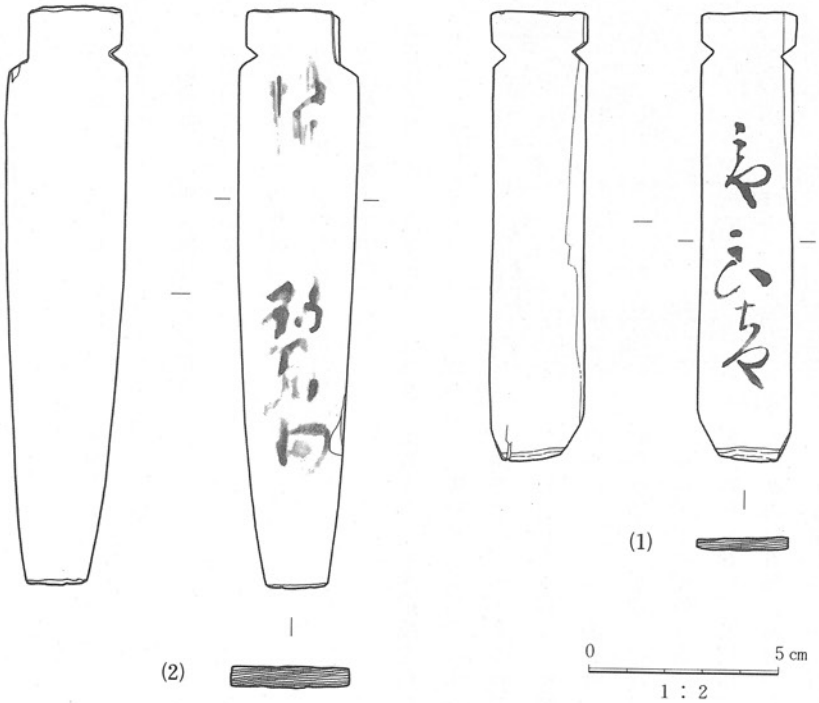

大阪・住吉大社境内遺跡で
木簡状木製品出土

住吉大社境内遺跡は、大阪市住吉区にある古墳時代～近世の集落跡・寺社跡で、(財)大阪市文化財協会が、一九九六年九月から一〇月にかけて民家建替えに伴う調査を実施した。

その結果、井戸二基、溝一条、多数のピットを検出した。井戸一基からは、一二世紀代の瓦器椀・土師器皿・ガラス製小蓋が出土。もう一基は、直径約一・五m、深さ約三・五mの素掘りの井戸。古式の瓦器椀などが出土し、一一世紀末に位置づけられる。井戸底から下駄・建築部材・木簡状木製品が出土した。

木簡状木製品のうち一点は、長さ二一五㎜、幅三三㎜、厚さ三㎜。もう一点が長さ二一五㎜、幅三六㎜、厚さ三㎜。ともに一端は圭頭状で、他端は円弧状に切り込み、片面にはそれぞれ裏面まで達しない浅い切り込みが三対ある。二点は同様な形状であること、切り込みのない面であわせると切り込みの位置が一致することから、二枚一組として紐で縛って使用したと考えられる。封緘木簡と同種の機能を果たしたものと推測されよう。

（平田洋司）